高城町文化財調査報告書　第４集

上原（うえはら）第３遺跡

平成６年度細井地区県営特殊農地保全整備事業に伴う
埋蔵文化財調査概要報告書

1995

宮崎県北諸県郡
高城町教育委員会

垂　飾（上）　　管　玉（下）

序

高城町教育委員会では、平成6年度細井地区県営特殊農地保全整備事業に伴い、宮崎県北諸県農林振興局の委託を受けて、埋蔵文化財の発掘調査を行いました。

今回の発掘調査では、縄文時代から平安時代にかけての数多くの貴重な資料を得ることができました。

特に、縄文時代の竪穴住居内から出土した垂飾や土壙内から出土したヒスイ製の管玉は、宮崎県の縄文時代の研究に影響を与えるだけでなく、今後の町民各位の歴史研究や文化財保護の向上に寄与することと期待しております。

末筆ながら、遺跡の発掘調査及び整理、本書の作成に際し、多大なるご協力、ご理解を賜った細井地区土地改良区、宮崎県北諸県農林振興局、宮崎県教育委員会文化課、各関係機関、町民各位の皆様方に深く感謝を申し上げる次第であります。

平成7 年3月

高城町教育委員会
教育長　新　地　文　雄

例　　言

1、本書は、宮崎県北諸県郡高城町大字有水の細井地区における県営特殊農地保全整備事業に伴い、平成6年度に実施した上原第3遺跡の発掘調査概要報告書である。

2、発掘調査は、平成6年9月1日から平成7年1月20日まで実施した。

3、発掘調査は、高城町教育委員会が主体となり、高城町教育委員会社会教育課主事白谷健一が行い、宮崎県教育委員会文化課埋蔵文化財第二係長面高哲郎、同文化課主査永友良典、同文化課主査石川悦雄、同文化課主査菅付和樹の調査指導を受けた。

4、調査組織は以下のとおりである。

調査主体	高城町教育委員会	
	教育長	新地文雄
	社会教育課長	松田俊夫
	課長補佐	有村修一
	文化係長	田中孝明
調査担当	町社会教育課主事	白谷健一
特別調査員	宍戸地質研究所	宍戸　章（石材鑑定）
調査指導	県文化課埋蔵文化財第二係長	面高哲郎
	県文化課主査	永友良典
	県文化課主査	石川悦雄
	県文化課主査	菅付和樹
調査補助		押川富代子、轟木　治

5、本書の執筆及び編集は白谷が行った。

6、出土遺物や写真及び図面は高城町教育委員会で保管している。

7、本書では、下記のとおりの遺構略記号を用いている。

ＳＡ－竪穴住居跡　　ＳＢ－掘立柱建物跡　　ＳＣ－土壙

ＳＤ－溝状遺構

8、今後、平成4年度に発行した高城町文化財調査報告書第2集『上原遺跡』を上原第1遺跡、平成5年度に発行した高城町文化財調査報告書第3集『上原遺跡（第2地点）』を上原第2遺跡と改称する。

本　文　目　次

第　Ⅰ　章　調査に至る経緯 …… 1
第　Ⅱ　章　遺跡の立地と環境 …… 3
第　Ⅲ　章　発掘調査の概要
　1、調査の内容 …… 4
　2、遺構 …… 4
　3、遺物 …… 9
第　Ⅳ　章　まとめ …… 10

報告書抄録 …… 11

挿　図　目　次

第　1　図　上原第3遺跡位置図 …… 2
第　2　図　遺跡周辺地形図 …… 3

図　版　目　次

巻頭図版　垂　飾（上）
　　管　玉（下）
図　版　1　A地区・B地区空中写真
図　版　2　D地区空中写真
図　版　3　A地区近景　B地区近景
　　C地区近景　D地区近景
図　版　4　縄文土器1　縄文土器2
　　石　鏃　石　斧

第Ⅰ章　調査に至る経緯

昭和63年より、高城町大字有水の細井地区において、宮崎県北諸県農林振興局による県営特殊農地保全整備事業が計画された。そのため事業地内の埋蔵文化財の有無が問題となった。

高城町では遺跡詳細分布調査を行っていないため、平成２年に宮崎県教育委員会文化課面高哲郎と高城町教育委員会社会教育課広池洋三が事業予定地全体の踏査を行った。その結果、かなりの広範囲で土器の分布が認められ、11ケ所の遺跡が確認された。

しかし、この計画は地元との調整がつかず、立ち消えの状態になったが、再び平成３年度に計画が持ち上がり、平成４年度から全体事業実施予定地の南側から工事を着工することになった。

そのため平成４年度の事業予定地の踏査を高城町教育委員会社会教育課白谷健一が行い、縄文時代から平安時代にかけての土器を採集した。その後、再度県文化課面高哲郎と町社会教育課白谷健一が踏査を行い、一部の場所については面高哲郎が試掘調査を行い、遺跡の推定範囲を想定した。

その結果を受けて、細井地区土地改良区、宮崎県北諸県農林振興局、高城町耕地課、宮崎県教育委員会文化課、高城町教育委員会社会教育課で埋蔵文化財について協議を行ったが、現状保存が困難な道路及び削平を行う部分については、記録保存の措置をとることとなった。

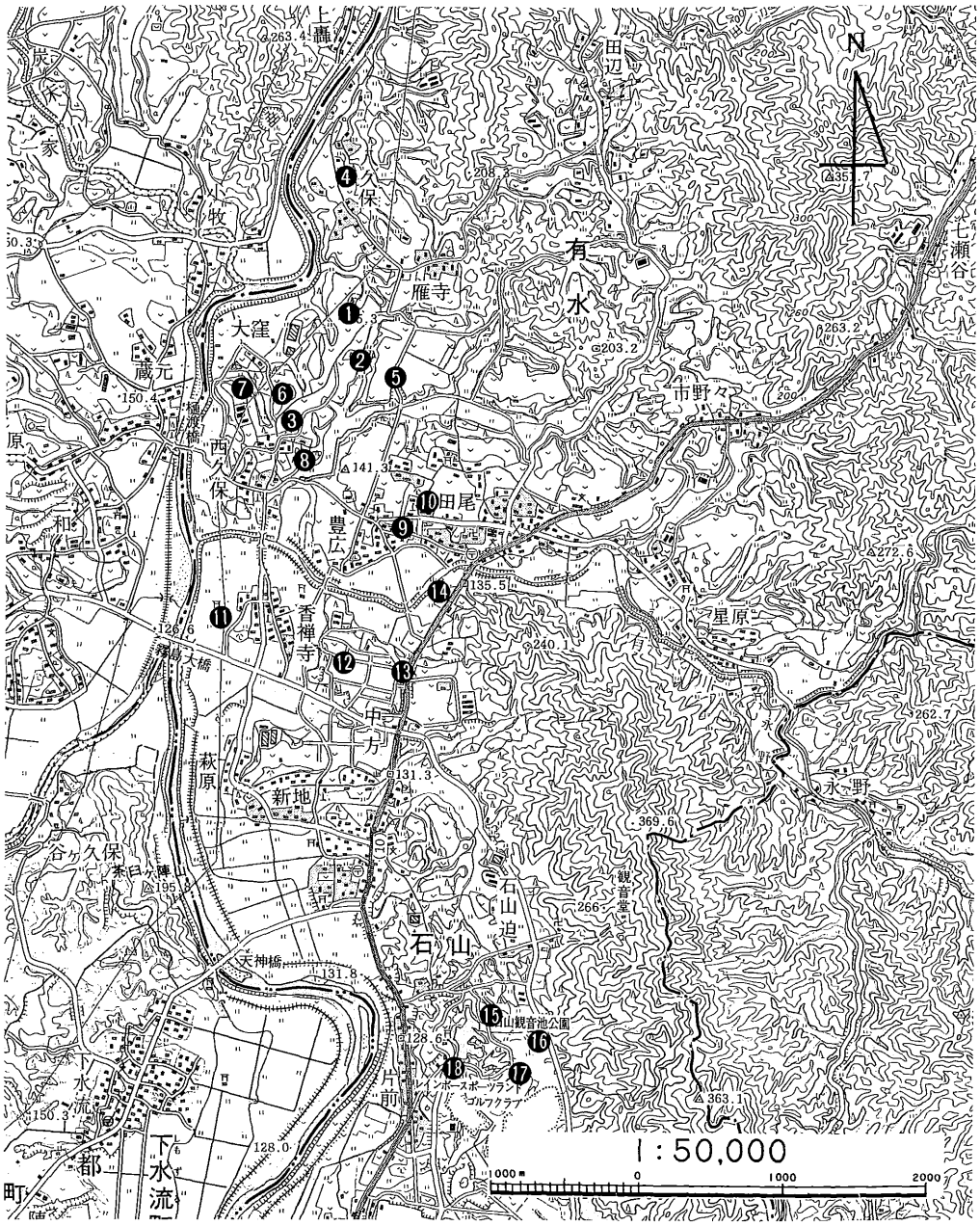
発掘調査は平成４年11月～平成５年３月の間実施し、調査の結果、 上原第１遺跡においては、古墳時代の集落跡が確認された。また縄文時代の竪穴住居跡や中世の掘立柱建物跡や溝状遺構が確認された。

平成５年４月になり、県文化課石川悦雄と東憲章、町社会教育課白谷健一の三者による踏査を平成５年度以降事業実施予定地内で行い、平成５年度事業実施予定地の協議資料としたが、その後の協議や諸般の事情により、平成５年度は県営特殊農地保全整備事業を実施しないことになった。

しかし、地元の強い要望や平成６年度の事業を円滑に進めることを考慮して、平成６年度事業実施予定地の一部、上原第２遺跡発掘調査を平成５年12月～平成６年３月の間実施した。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡や弥生時代の竪穴住居跡が一軒ずつ出土している。高原スコリア直下の層から、坏と刀子が共伴しているので、土壙墓だと考えられる。

平成６年度は県営特殊農地保全整備事業を平成６年11月から行うため、工事施

工以前の平成６年９月から発掘調査を行った。



第１図　上原第３遺跡位置図（１／50,000）

１、上原第３遺跡　２、上原第２遺跡　３、上原第１遺跡　４、八久保遺跡
５、雁寺遺跡　６、須田木城　７、下の城　８、高城古墳群21･22号墳
９、高城古墳群20号墳　10、高城古墳群19号墳　11、香禅寺遺跡
12、高城古墳群16･17号墳　13、高城古墳群15号墳　14、高城古墳群14号墳
15、一本松遺跡　16、野中第３遺跡　17、野中第１遺跡　18、城ケ尾遺跡

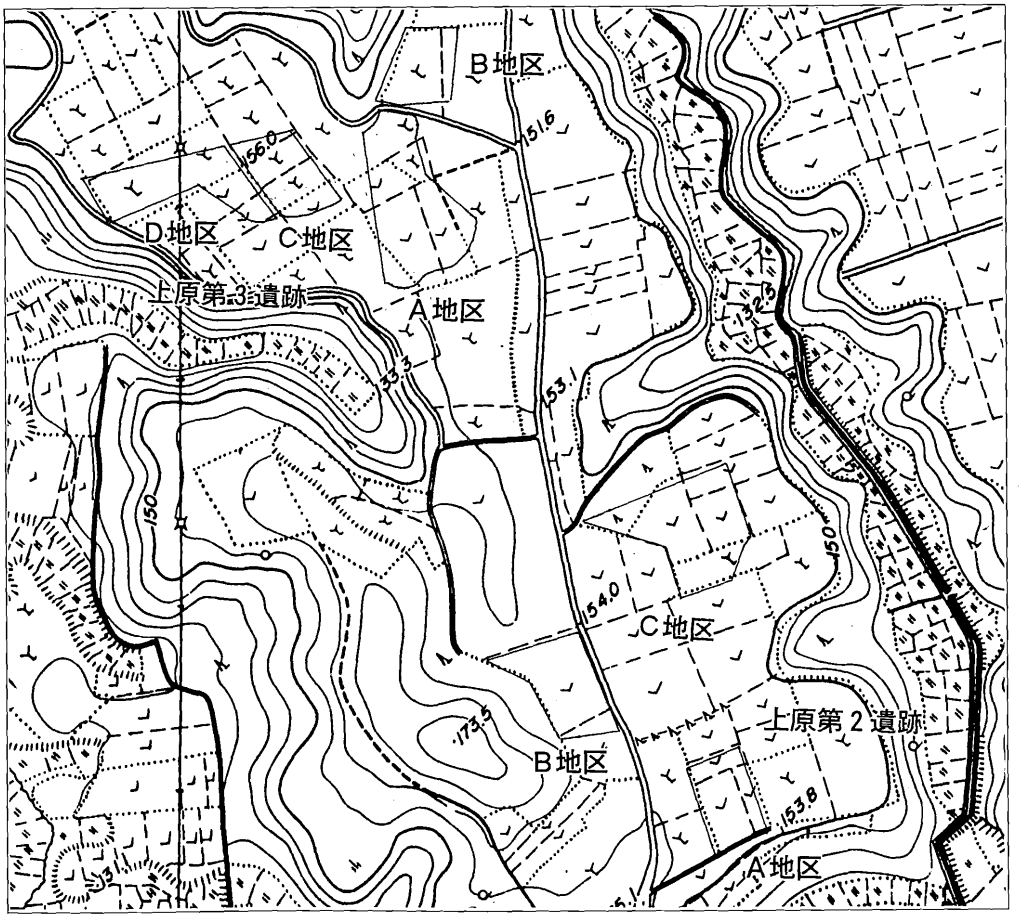
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

高城町は宮崎県の南西部に位置する都城盆地の北部にあり、北は野尻町、東は高岡町、山之口町、南は都城市、三股町、西は高崎町に囲まれている。

上原第３遺跡は高城町の中心部より、北に12kmほどの所にあり、西を大淀川、南を有水川に挟まれた台地上に位置している。台地にはいくつかの谷が入っており、水が湧き出る所がある。

周辺の遺跡は縄文時代の八久保遺跡、古墳時代の雁寺遺跡の他に県指定古墳が８基あり、有水川を越えた石山の香禅寺遺跡からは板石積石室が出土している。遺跡の西側には下の城址や須田木城址といった中世山城もある。上原第１遺跡や上原第２遺跡も、同じ台地上に位置している。

大淀川を越えた高崎町には、古墳時代の鳩越第１遺跡や縄文時代の鳩越第２遺跡や中世山城の柳の城址がある。



第２図　遺跡周辺地形図（１／5,000）

第Ⅲ章　発掘調査の概要

1、調査の内容

上原第３遺跡の発掘調査は高城町教育委員会が主体となり、平成６年９月１日から平成７年１月20日まで行った。

工事施工面積は10haで、調査対象面積は10,000㎡であったが、場所によっては作物の関係で調査ができない状態であった。そのため作物の刈り入れが終わっている畑から、重機で表土を剥ぎ始め、剥ぎ終わった畑からＡ地区、Ｂ地区、Ｃ地区、Ｄ地区と設定した。Ａ～Ｄ地区の４地区とも、トレンチャーによる撹乱をかなりの面積受けているが、遺物包含層は残存している。

基本層序は、第Ⅰ層が表土（耕作土）、第Ⅱ層が高原（たかはる）スコリヤ（焼けボラ）、第Ⅲ層が黒色土、第Ⅳ層が黒褐色土（ボラ少量含む）、第Ⅴ層が黒褐色土（下にいくほどボラ多く含む）、第Ⅵ層が御池（みいけ）ボラであった。第Ⅱ層の高原スコリヤ（焼けボラ）　は788年（延暦７年）に霧島の御鉢から噴出した火山灰と言われているので、奈良時代と平安時代の土層を明確に区別することができる。

出土遺物は４地区とも、縄文～中世にかけてのものであり、縄文時代の土器が半分以上占めている。

縄文時代の土器は縄文時代後期の市来式土器、縄文時代晩期の黒川式土器や孔列文土器が出土している。縄文時代の竪穴住居跡が５軒、土壙がかなりの数出土しているが、その時代のものである。

2、遺　構

Ａ地区

ＳＡ－１

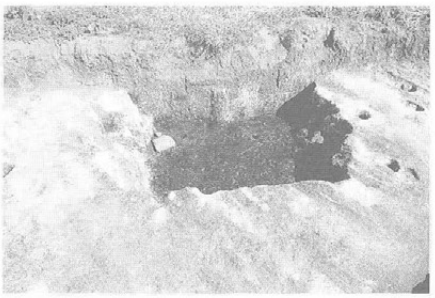
調査区の西壁面に出土しているため、正確には分からないが、一辺が約3.5ｍほどの隅丸方形プランの住居跡である。検出面からの深さは約40㎝である。縄文時代晩期の土器が出土している。

ＳＡ－１　遺物出土状況

ＳＡ－２

調査区の北壁面に出土しているため、正確には分からないが、長軸３ｍ、短軸2.3ｍの隅丸方形プランで、検出面からの深さは約50㎝である。床の検出面は御池ボラ層とアカホヤ層の間の黒色土であったが、若干掘りすぎたためであり、貼り床であったと考えられる。西側に掘り込んだ張り出し状の段があり、入口の可能性が高い。縄文時代晩期の土器が出土している。

ＳＡ－２　検出状況



ＳＡ－２　完掘状況

ＳＡ－３

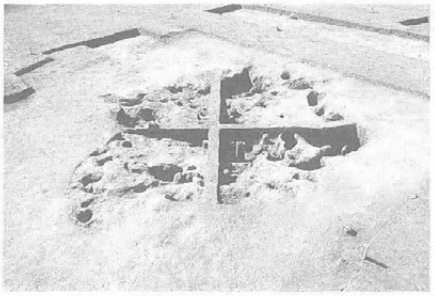
最大径4.9ｍの楕円形プランで、検出面からの深さ約40㎝である。御池ボラ層をいくぶんか掘り込んでおり、壁面にいくつかのピットが巡っている。縄文時代後期の土器が出土している。

ＳＡ－３　検出状況

ＳＡ－３　完掘状況

ＳＡ－４

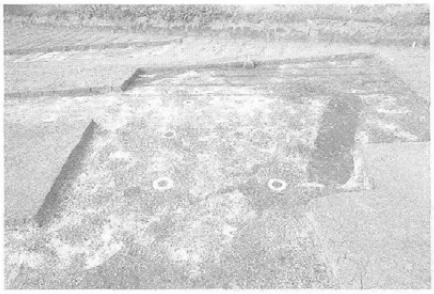
最大径５ｍの楕円形プランで、検出面からの深さ約40㎝である。御池ボラ層を若干掘り込んでおり、中央部に焼土があり、その下に土壙を持っている。いくつかの土壙が噛み合っているため、撹乱しているが、縄文時代後期の土器が出土している。



ＳＡ－４　遺物出土状況

ＳＢ－１

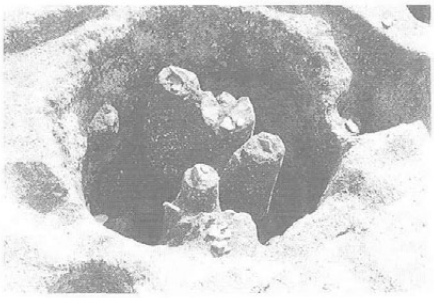
１間×２間でプランで、ピット径は約20～30㎝で、検出面からの深さは約20㎝である。ピット内の埋土は高原スコリア混じりの茶褐色土であった。



ＳＢ－１　検出状況

ＳＣ－１

最大径90㎝の円形プランである。検出面からの深さは約60㎝である。縄文時代晩期の土器が出土している。



ＳＣ－１　遺物出土状況

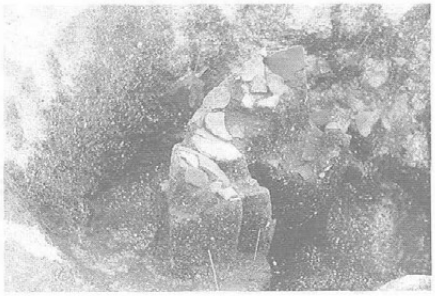
ＳＣ－２

長軸130㎝、短軸80㎝の不整楕円形プランで、検出面からの深さは約30㎝である。

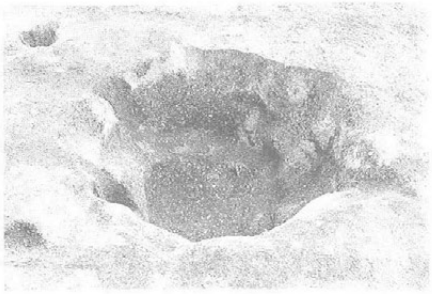
Ｂ地区

ＳＣ－１

最大径２ｍの円形プランである。検出面からの深さは約90㎝である。縄文時代晩期の土器が出土している。



ＳＣ－１　遺物出土状況



ＳＣ－１　完掘状況

ＳＣ－２

最大径1.3ｍの楕円形プランである。検出面からの深さは約50㎝である。中央部に石が置いており、底にピットがある。

ＳＣ－３

最大径80㎝の円形プランである。検出面からの深さは約30㎝である。縄文時代晩期の土器が出土している。

ＳＣ－４

最大径１ｍの楕円形プランである。検出面からの深さは約40㎝である。縄文時代晩期の土器が出土している。

ＳＤ－１

調査区の南壁面に出土しているため、正確には分からないが長さ約18ｍ、最大幅３ｍ、最小幅30㎝である。検出面からの深さは約30㎝である。縄文時代晩期の土器が出土している。

ＳＤ－１　完掘状況

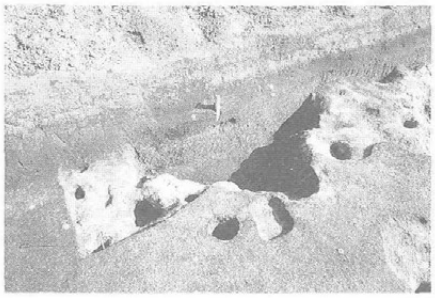
ＳＤ－２

調査区の北壁面に出土しているため、正確には分からないが長さ約24ｍ、最大幅２ｍ、最小幅１ｍである。検出面からの深さは約30㎝である。

Ｃ地区

ＳＡ－１

調査区の東壁面に出土しているため、正確には分からないが、一辺約2.5ｍほどの隅丸方形プランである。検出面からの深さは約50㎝である。弥生時代の土器が出土している。



ＳＡ－１　完掘状況

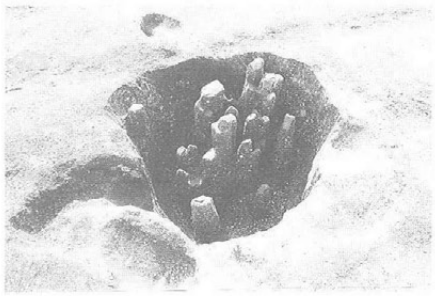
ＳＣ－１

最大径80㎝の楕円形プランである。検出面からの深さは約30㎝である。縄文時代晩期の土器が出土している。

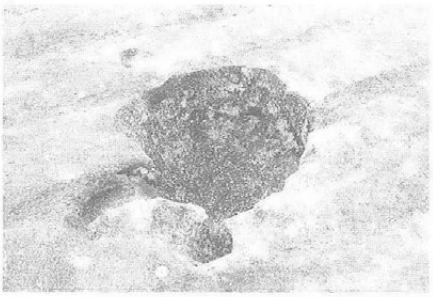
Ｄ地区

ＳＣ－１

最大径1.2ｍの円形プランである。検出面からの深さは約70㎝である。縄文時代晩期の土器が出土している。



ＳＣ－１　遺物出土状況



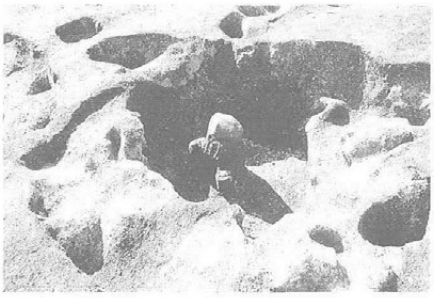
ＳＣ－１　完掘状況

ＳＣ－２

長軸1.8ｍ、短軸1.2ｍの隅丸長方形プランである。検出面からの深さは約70㎝である。縄文時代晩期の土器が出土している。

ＳＣ－３

最大径1.3ｍの円形プランである。検出面からの深さは約50㎝である。中央部に石が置いており、縄文時代晩期の土器が出土している。



ＳＣ－３　遺物出土状況

ＳＣ－４

長軸70㎝、短軸60㎝の隅丸方形プランである。検出面からの深さは約60㎝である。粘土が焼けた状態で入っており、土師器が出土している。

3、遺物

遺物の出土量は、A地区、C地区、D地区、B地区の順に多かった。各地区とも、縄文時代後期、晩期の土器が多く、陶磁器の出土はほとんどなかった。

縄文時代後期の土器は口縁部が波状口縁で、貝殻腹縁文を胴部に施すものである。土器の色調は赤褐色系がほとんどである。

縄文時代晩期の土器は組織痕を残す土器や孔列文を口縁下2㎝ほどのところに貫通、もしくは未貫通の土器である。土器の色調は褐色系がほとんどである。

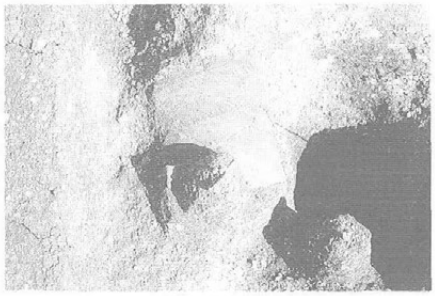
須恵器は土器片で4，5点で一個体を成すものだけであった。内外両面に叩き痕を持つ壺形であった。

石器の出土も多く、石斧が打製、磨製を合せて10数点、石皿が尾鈴山から産出した石材を使用したもので2点出土している。

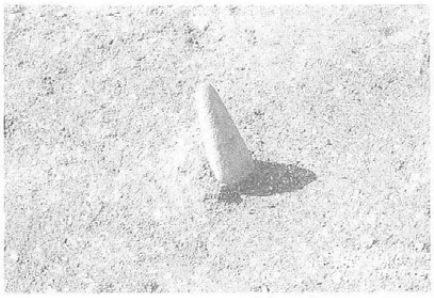
石鏃の出土も多く、完成品が33点、未完成品が2点の計35点が出土している。完成品の石鏃の形態の内訳は、打製石鏃が31点、磨製石鏃が3点であった。石材の内訳はチャートが18点、無斑晶流紋石が9点、頁岩が4点、黒耀石が2点、流紋岩が1点、ホルンフェルスが1点であった。

垂飾品は3点出土しており、そのうち2点は遺構内からである。A地区のSA－2から出土している垂飾は頁岩製で、長さ2.8㎝、最大幅2.3㎝である。中央より上部に穿孔をし、その下に「×」の線刻を施している。縁にも、刻目を施しており、断面にも線刻を施し、一周している。裏表同じデザインである。

D地区のSC－3からは、ヒスイ製の管玉が出土している。土壙の中央部に石が置いており、その下から出土している。長さ1.7㎝、穴の直径は4㎜ほどである。



縄文土器出土状況



石斧出土状況

第Ⅳ章　まとめ

今回の発掘調査では、竪穴住居跡５軒、掘立柱建物跡１棟、溝状遺構２条、土壙数10基が出土している。現在、なお整理段階であるため、詳しく考察することができないが、若干の私見を述べてみる。

高城町において、縄文時代の竪穴住居跡は上原第１遺跡で８軒、上原第２遺跡で１軒出土している。時期はいずれも縄文時代後期である。上原第３遺跡では、縄文時代の竪穴住居跡は４軒で、時期は後期が３軒、晩期が１軒であった。住居跡のプランは、後期が円形で、晩期が方形であった。一般的にいわれている、円形→方形へということが、高城町においても実証された。

また、今回、土壙の数も多かった。その中で、今まで貯蔵穴と墓壙などの区別ができず、ただ土壙といっていたが、今回、土壙の中央部に幼児の頭大ほどの石を配していたものが２例あった。その中の１例がＤ地区ＳＣ－３である。石の下から、ヒスイ製の管玉が出土するということは、墓の可能性を窺わせるものであり、縄文時代の土壙墓とはっきり述べられるのは、高城町においては初見である。今後、縄文時代の土壙墓については、脂肪酸分析を行い、さらに追求していきたいと考えている。

上原第３遺跡では同じ遺跡内で、竪穴住居跡、土壙墓、貯蔵穴が共伴したことは、縄文時代の集落を思わせるものであり、刻目の垂飾や管玉が出土したことは、宗教的、呪術的なことを司る長や巫女の存在を想像させる。

平安時代の掘立柱建物跡は、その時代に人の居住があったことを意味するものであり、上原第１遺跡では植物珪酸体分析から、陸稲を行っていたことが分かっている。当然畑作を行っていた人々との関連を考えさせられる。

今後の研究課題としては、縄文時代の集落が何といっても最大の課題であろう。集落＝定住を意味しており、高城町において、その時代に成熟した社会が存在したことの証しである。

現在、遺構・遺物が未整理の段階で、詳細なことを報告できないため、本報告に期したいと思う。

〈参考文献〉

『高城町史』　高城町教育委員会　１９８９

「遺跡詳細分布調査報告書」　『高崎町文化財調査報告書第３集』
高崎町教育委員会　１９９２

報　告　書　抄　録

ふりがな	うえはら
書名	上原第3遺跡
副書名	平成6年度細井地区県営特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書
巻次	
シリーズ名	高城町文化財調査報告書
シリーズ番号	第4集
編著者名	白谷健一
編集機関	高城町教育委員会
所在地	〒885－12　宮崎県北諸県郡高城町大字穂満坊46－2　TEL0986－58－2317
発行年月日	西暦　1995年3月30日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
うえはら 上原第3遺跡	みやざきけんきたもろがたぐん 宮崎県北諸県郡 たかじょうちょうおおあざありみず 高城町大字有水	453439		31° 51′ 51″	131° 7′ 40″	19940901～ 19950120	10,000	細井地区県営特殊農地保全整備事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別
上原第3遺跡	集落

主な時代	主な遺構
縄文時代後期	竪穴住居跡　3軒 その他土壙
縄文時代晩期	竪穴住居跡　1軒 その他土壙
弥生時代前期	竪穴住居跡　1軒 その他土壙
平安時代	掘立柱建物跡　1棟

主な遺物

縄文土器（市来式、黒川式、孔列文）
弥生土器、土師器、須恵器
垂飾、ヒスイ製管玉、石鏃、石斧

特記事項

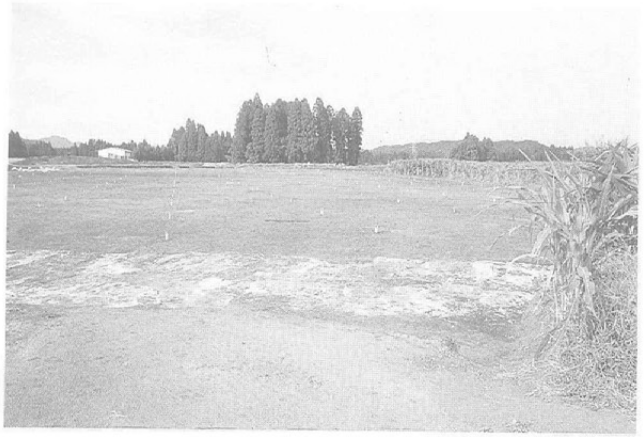
・住居跡、土壙墓、貯蔵穴を確認。
縄文時代集落の様相を知ることができる。

図　　版

A 地 区 ・ B 地 区 空 中 写 真　　一 図

図版 2

D 地 区 空 中 写 真

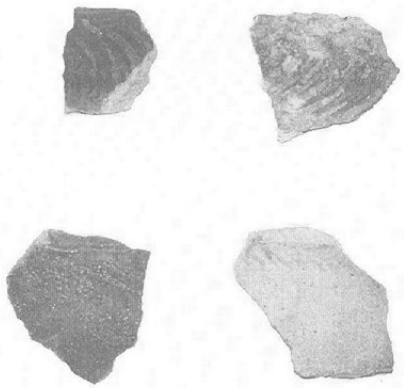


Ａ地区近景（南から）

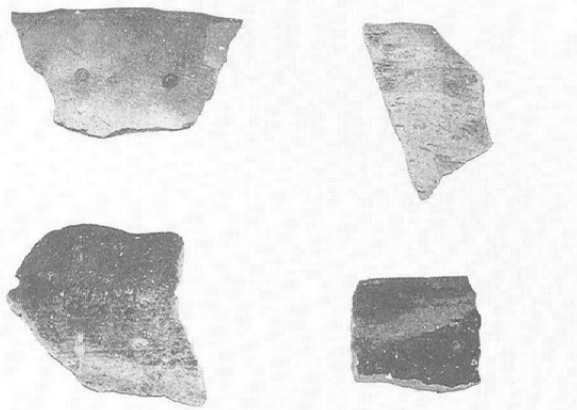
Ｂ地区近景（北から）

Ｃ地区近景（南から）

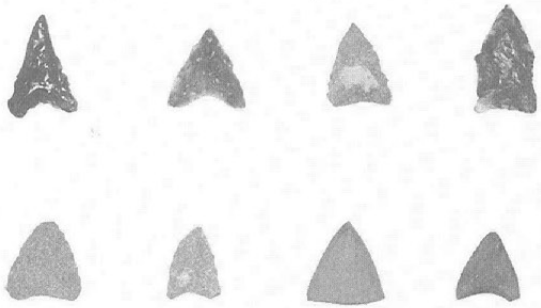
Ｄ地区近景（東から）



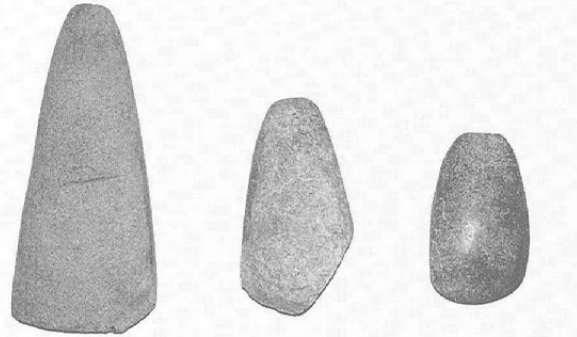
縄文土器 1



縄文土器 2



石鏃



石斧

高城町文化財調査報告書　第４集

上原第３遺跡

発行年月　平成７年３月

発　　行　高城町教育委員会

印　　刷　株式会社　文　昌　堂